アーカイブ後世に教訓

■米ハーバード大・ゴードン教授に聞く

東日本大震災の教訓を記録し、次代に伝えるため、国内外の研究機関などが震災に関する多様な情報のデジタルアーカイブを進めている。米国ハーバード大のライシャワー日本研究所は「2011年東日本大震災デジタルアーカイブ」を運営。河北新報の連載企画「わがことと防災・減災」の英訳版も発信している。国際規模のデジタルアーカイブ・サイト作成を指揮した研究所所長のアンドルー・ゴードン同大教授（62）に意義などを聞いた。

（聞き手はデジタル編集部・矢萩智也）

52年、米国ボストン生まれ。95年からハーバード大教授。98～04年と10～11年、同大ライシャワー日本研究所所長。専門は日本近現代史。

―デジタルアーカイブ　3月に公開されました。なぜ提案をできるのか記し、デジタル情報が大量に発信されては震災から1年後の12年「震災後、日本にどん　合いました。当時、デジ存を呼び掛けていました。さまざまな組織が保た。その情報に組織的に作ろうと考えたのです」

―なぜデジタル情報を残すのですか。

「現代は、災害に限らず大きな出来事、重要なプロセスが進行する際、その記憶や記録のかなりの部分がデジタル情報として保存される時代になっています。ある人が自分の過去のアクセスできるサイトを振り返るとき、あるいは後世の人が歴史を書く

ときなら、デジタル情報が残っていなければ、正しく考察できないのです」

「デジタル情報の中には、ツイートなど後に残りにくく、消耗しやすいものがあります。われわれのアーカイブに保存されていて、既に情報発信元のサイトが消えた情報も少なからずあります」

―「そこで、情報を待つ」とは。

「われわれは、デジタル情報をデータとして保存するネットワーク型アーカイブを提供する、ネットワーク型アーカイブにしました。サイトにアクセスしたら、日本の国立国会図書館「ひなぎく」、東北大図書館「みちのく震災伝」など、提携している別のデジタルアーカイブが集めたデータです。

ネットワーク型

2011年東日本大震災デジタルアーカイブ　収集した震災関連のデジタル資料にアクセスできるネットワーク型アーカイブ。保存データは震災直後に被災地などで発信された80万件のツイートのほか、30万～40万件の新聞の見出しデータベース、15万件の写真、3万～4万件のウエブサイトのコピーなど約140万件。日本語と英語で表示する。URLはhttp://3darchive.org/

世界中のパートナーがなければ、保存データは残っていなかったかもしれません。

―「研究所自ら集めた」

「アンケートなどを通じて、世界規模でデータを集めてデジタルアーカイブを構築する意味は何ですか。

「人間の介入による変容が進む時代を迎え、世界のどこでも未曾有の災害が起こり得るようになった。震災に関するあらゆる情報を集めて、災害が起こり得るようになった。英訳版は北新聞オンラインで順次公開中です。

・減災の意識向上を考える際、世界中からアクセスできるインターネットを通じて、世界規模でデータを集めてデジタルアーカイブを構築する意味は何ですか。

「わがことは地震、災害の恐怖感、いも高まるでしょう」

多くの利用期待

―国際規模でデジタルアーカイブを構築する意味は何ですか。

「わがことと　防災・減災」の英訳にも協力してもらいました。英訳版は北新聞オンラインで順次公開中です。

・「わがことは地震、災害の恐怖感、いも高まるでしょう」

―「わがことは地震、災害の恐怖感、いも高まるでしょう」

「アーカイブの情報は、将来の災害に備える教訓になります。特に、震災の人の利用してもらえると期待しています。

会議では、教育現場でアーカイブの活用を呼び掛けるワークショップ開催も考えています。

・防災・減災の意識向上を考える際、世界中からアクセスできるインターネットを通じて、世界規模でデータを集めてデジタルアーカイブを構築する意味は何ですか。

―「わがことは地震、災害の恐怖感、いも高まるでしょう」

「アーカイブの情報は、将来の災害に備える教訓になります。特に、震災に見舞われた日本では、多くの人が利用してもらえると期待しています。

会議では、教育現場でアーカイブの活用を呼び掛けるワークショップ開催も考えています。

・「わがことは地震、災害の恐怖感、いも高まるでしょう」